

年 月 日 /

学校 年 組 番 名まえ

2022年10月16日付

鵜飼いで使われるウミウの全国唯一の捕獲地である日立市で、伝統的な捕獲技術や鵜漁を観光の「看板商品」とする取り組みが始まった。日立にしかない観光資源として魅力を発信し、市内の周

遊を目指す。捕獲や鵜漁は後継者不足が深刻化しており、知名度を高めることで、人材確保や技術の継承につなげたい狙いもある。

(日立支社・磯前有花)

日立、鵜で観光振興

■価値ある「唯一」

川面に光が当たり、腰みの着けた鵜匠の姿が闇に浮かぶ。巧みに操られた鵜が魚をくわえようと拍手が起こった。



鵜を観光事業に結び付けようと、日立市観光物産協会は、同市十王町の国民宿舎「鵜の岬」で先月下旬、旅行事業者ら約30人を対象にイベントを開いた。鵜飼いの歴史は古く、日本書紀や古事記にも見られる。中でも、鵜匠が川に直接入り、鵜を操る伝統技法「徒歩鵜漁」を見られるのは関東以北では同市だけ。毎年夏の十王まつりで再現されている。一行は翌朝、捕獲場を見



イベントで披露された伝統技法の「徒歩鵜漁」＝日立市十王町伊師

魅力発信 捕獲や漁、周遊目指す

学。岸壁に設置された小屋「鳥屋」に入り、ウミウ捕獲技術保持者から説明を聞くとともに、熱心に質問した。鵜の岬では特別料理を味わい、環境保全に取り組み「十王川を楽しむ会」による講話を聞いた。意見交換では、旅行事業者から「売店を出し、祭りのようにしてはどうか」「鵜を入れる竹籠を作るなど体験内容を増やしてはどうか」といった提案が相次いだ。

参加した長谷川観光社(小美玉市)の長谷川晋也社長(68)は課題を挙げつつ、「日本で最後のウミウの捕獲場所は価値がある」



ウミウ捕獲技術保持者の案内で「鳥屋」を見学する参加者＝日立市十王町伊師

と指摘。他の参加者からも商品化を検討したいという声がかかった。

■長時間の滞在を

「デザイン性の高いJR日立駅や市かみね動物園など、一つ一つの観光地は知られていても、日帰り観光のイメージを持たれているよつだ」

同協会の担当者は課題を示す。地元経済の活性化のためにも、宿泊を伴い、滞在時間を長くする必要はあることから、ウミウの捕獲場所や徒歩鵜漁の観賞など、昼と夜の観光を組み合わせたことを考えた。こうした取り組みは本年度、観光庁の支援事業に採択された。地元関係者らで話し合い、内容に磨きを加けるとともにPR動画を制作。来年には市の看板商品として旅行商品の販売を目

ウミウ 鵜飼いに使われる渡り鳥。日立市は全国唯一の捕獲地で、全国11カ所の鵜飼地へ供給している。渡りに合わせ、春(4～6月)と秋(10～12月)に捕まえる。1947年に国の一般保護鳥に指定され、捕獲には許可が必要。捕獲技術は、92年に市の無形民俗文化財に指定された。

指す。

同協会の担当者は「(伝統技術などは)特別なものであり、付加価値を付け、日立にしかできない旅行商品をつくり出したい」と意気込む。

■後継者の確保へ

観光振興へ協力する捕獲技術保持者や各団体にとっ

ては、後継者不足の問題がある。捕獲技術保持者は現在3人で、うち2人は70歳を超えた。根本好勝さん(71)はイベントの講話で後継者のいない苦労を述べた上で、「日本の伝統文化の一つである鵜飼いを何とか支えたい」と思っている。後継者の確保を語った。

徒歩鵜漁を披露した「十王川徒歩鵜漁伝統文化保存会」は、60歳以上のメンバー12人がボランティアで活動する。事務局の飯塚優さん(60)は「自分たちは伝承していく役割を持っている。広く知ってもらおうことが(保存の)一番の近道。若い人に入ってもらいたい」と話し、伝統文化の継承機運の高まりに期待を込める。同協会の担当者は「地域の主役の方々の思いに沿いながら、みんなでやろうと言ってもらえる看板商品にしたい」と話した。

(一部再編しています)

【問1】鵜飼いの歴史って、いつごろから?

【問2】鵜の捕獲場がある地名は? 日立市十王町伊師

日本書紀や古事記にも記録

【問3】課題となっていることはなに?

→約1300年前には行われていた

後継者の確保

読み取れる、かざくや、ともだちにきいてみてね

